

2CVも民芸のうち？

たにかわ しゅんたろう
谷川 俊太郎

プロフィール
1931年東京都生まれ。詩人。1952年
第一詩集『二十億光年の孤独』（創元社）を
刊行。1975年『マザー・グースのうち』（章
思社）で日本翻訳文化賞、1992年『日
の地図』（集英社）で読売文学賞、1993
年『世間知ラズ』（新潮社）で萩原朔太郎賞
2010年『トロンコロジー』（新潮社）
で鮎川信夫賞など受賞・著書多数。

私はどちらかという美術館で見るアートよりも、巷で手に入れやすく、身近に置けるクラフトの方が好きだ。幼い頃から父母に連れられて駒場の民藝館に行っていたし、自動車やラジオなどの機械類の、中身や理論ではなく外側の形態に興味を持つ少年だったから、当時言われていた工業デザインという分野に、自分の将来を見るところに叶わぬ夢を抱いたりもしていた。

詩を書き始めてからも、私はボードレールやイエーツを読むよりも、「マザー・グース」のような伝承わらべうたを、日本語に移すことの方に、詩の世界での手応えを感じていた。無名の作者の手になる日用品や、歌謡の中に、自分の求める美を見つけるのが楽しかった。

複製でしか知らなかったフェルメールを見にオランダへ行つて、本物の持つプレゼンスに深く心を動かされた時、私が旅の記念に買って帰ったのは、子どもの立小便を描いた古いデルフトスタイルの一枚だった。同時に私はまた空港の売店でフィリップスの車載カセットデッキも買いこんでいた。機能とともにその無駄のないデザインが好きだったから、自分で当時乗っていた（ヘカーリーナ）に組みこんで、パロック音楽など聴いていた。

民俗の（学）には疎いが、私は常民が生み出

す広義のアートには若い頃から魅力を感じていた。自動車やラジオにしても設計のコンセプトと切り離せないパッケージに独特の美を感じていたのだ。技術上の新しい古いは絵画や彫刻と同じく私にとつてはあまり問題ではなかった。車にもラジオにもヴィンテージと称される時代もあるのだ。

私の父は哲学を学んだ人だったが、学問よりも気に入った骨董を蒐集する方に熱心だったように思う。一九七五年に出版された『骨董夜話』という本に、白州正子らと並んで父もいくつかの愛蔵品を披露しているが、それが例えば紀元前に作られたエトルリアの鏡であっても、まだアーティストという存在が自覚されなかった時代の民芸と呼んでもおかしくないと思ふ。商う店が増えて民芸という言葉に独特の臭みを感じられるようになってしまったのを、私は残念に思っている。

古いものを見る父の眼を私は信頼していたが、外出時には必ず三つ揃いを着ていた父は、ジーパン・Tシャツの私に困惑していた。だがその父が私の初恋の車、まるでブリキ細工のようなシトロエン2CVを気に入ってくれたのは意外だった。用途は異なっている、時代が離れていても、世間の評価に惑わされず、美しいものは美しいと感じるのは父の血かと思つた。

月刊 みんなぱく

12月号日次

- | | |
|---|--|
| <p>1 エッセイ 千字文
2CV も民芸のうち？
谷川 俊太郎</p> <p>2 特集 先住民の言語
国際「『先住民』言語」年と
消滅の危機に瀕した言語と
吉岡 乾</p> <p>4 グアテマラのマヤ諸語
八杉 佳穂</p> <p>5 オーストラリアのワロゴ語
——宝石のような言語
角田 太作</p> <p>7 日常空間にアイヌ語を
北原 モコツウナン</p> <p>8 道路標識から読み解く先住民族の思い
庄司 博史</p> <p>10 ○○してみました世界のフィールド
村人と一緒に演奏する
寺田 吉孝</p> | <p>12 みんなぱく Information</p> <p>14 想像界の生物相
マネキンとマンドラゴラ
——人形の不気味
山中 由里子</p> <p>16 みんなぱく回遊
ワヤン人形の目
福岡 正太</p> <p>18 シネ倶楽部 M
日本とミャンマーのはざままで
——「僕の帰る場所」
横山 廣子</p> <p>20 ことばの迷い道
寂しさいろいろ、惜しさいろいろ
韓 必南</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|--|